

特 248

723

政治問題

政局紛糾の二週間

猪突に過ぎぬ本一乙



0004801-000

特 248-723

政局紛糾の二週間

大月社会問題調査所

昭和9

ABC

政局紛糾の二週間

— 猪突に過ぎた岡本一乙 —



序

綱紀問題を端緒として、

爾は、下原今、宇垣系、

この均衡を維持するの

つてゐる。この二週間ばかりの政局は、

此をめぐる次期政権の準備策動、政友會の内訌、大同團結派の動き、虎

内貴衆議員に承を引く院外衆議院の動き等々、これ等の諸勢力の交互

に錯綜した一連一連の、日に日に新なる事情を生み出して行くやうな

有様であつた。



百々の現象だけを見ておると、實際政局が何ふ片体くのみ分らない。國同は國同、大同因結派は大同因結派で、各々その特殊な立場と、特殊な見解から、主観的に情勢を認識し、各々信ずる所に向つて、自信有りげな行動を採つてゐる。

今、本藤内閣の運命を、こゝで決定的に言い切る事は困難であるが、現在の諸情勢から推して、その存在性が可成り鞏固な基礎をもつてゐる事は事實である。本藤内閣は、右翼と、及右翼の闘争の均衡の中を維持されてきたのだが、この事情は、今回の政局動搖で、最も熾烈な形で現はれた。伊澤は、今日でも、實際のハラは宇垣である。彼が今一木擁立で動いてゐるのは、宇垣の實現性に見極めがついたからである。

所謂伊澤の獨立目標の變更は、平沼の「力」が虎内（國同）及び虎外において非常に強くなり、殊に軍部内右翼の方がこれに集中されておると云ふ、對立勢力の出現である。宇垣も平沼も、現在實現性は高くなつてゐるが、これは本藤内閣の特殊な任務が、一面さうさせて置く譯だ。時代

は、同じく本藤内閣の任務もまさか然りだが、政党内閣へ、財閥内閣へ、社会的には右翼精神を次第に清算して行く事である。

しかし、西園寺公が赤次氏に言つたやうに、政治は「直線」に進むものではなく、迂回して、「円形」に進入して行く。上層右翼の發達は、荒木陸相が退却したとしても、どう定形的に、直線的に消滅するものではない。今回の次期政權確立運動における平沼の出現が即ち然りである。以下、少しくこの二週間に錯綜せる政局の従横面相の分析を試みよう。

一、鳩山文相の辞職

鳩山文相の單独辞職か、それ共一連托生を主張するかは、現政局の動向を決定する樞軸であつた。

西本一己の査問委員會は、形式上綱紀問題で、鳩山文相事件調査のどしどしはなかつたが、事實上この査問委員會は、鳩山文相進退の基石をなすものであつた。

鳩山が、岡本に暴露されたまゝ、下、火く夫、その橋弁した醜聞が一般に確認されたまゝ、心、それを理由に単独辞職をすする事は、一人鳩山そのもの、政治的生命の没落を意味しただけでなく、久原派の策謀に敗北して、政友會内に於ける鈴木總裁の没落を將來する事である。

この進退問題は極めて重大であつたと言ふ事は、単独辞職が鈴木總裁派に株つて、致命的な問題であつたと云ふだけなく、反對に、一進托生主義を採つた所で、采るべき政友會が、鈴木派に当采せぬ事であつた。當時の見透しは、一般に本藤内閣の辞職であつて、この後、采るものは即ち、高橋首班の久原、床次、岡本の一部、民政の聯合に自ら反鈴木派の内閣であつた。

高橋内閣の立役者は、今では三土であつた事が分つた(後述)が、これは、とりも直さず鈴木派の没落を意味する。そこを鳩山の進退問題は、何れにしても鈴木派の難問題であつた。單独辞職を採つても、一進托生主義を採つても、總裁派の危機は消滅しな

い。

又、当時の閣僚の意見を見ると、高橋首相は、一貫して「フォード主義」(即ち分品を取換へる意味に於いて)で、公然と、「辞めなければならぬ者は、心人辞めたい、と」言い放つておた。本藤の意志もより然りだらう。内閣もこれを支持しておた。

閣内の意見は、以上三長老の事実上に於ける独裁であるから、これが政府の意見を決定するの見てよい訳であるが、夫も永井と三土及び後藤農相は、一進托生主義であつた。その三人が、一進托生を主張するに、三人共各々別々の理由があつた。

永井首相は、綱紀問題の拡大が、自分の足下へ飛火するのを懸念した訳である。即ち、南洋興業會社の暴露がそれである。

三土鐵相は、第一には、高橋内閣の諒解は大同因結派と出来ておて、万が一と云ふ条件下、高橋の諒解を得ておるのだから、自分としては、綱紀問題に引つか、らずに、或る可く、次の内閣に登場した

いと云ふ事と、次ぎには、勿論、永井と同様に、綱紀問題の拡大を恐
れ天の下である。

後藤農相——は、既定の方針で、平沼内閣樹立運動の一端として、
此れを主張したゞけである。

如上、閣内の對立と、一方鳩山攻撃では、東京の小新聞が活躍した事
も当時の事情の一つとして附け加へねばならぬ。二月十六日、岡本の
鳩山暴露事件の直後、東京の夕刊新聞等は、鳩山の發妄と、その發妄の
子の入籍問題を起訴されておる事実をベロ口報導した。

又、鳩山辞職の直前には、天塩産金鉱業株式会社法律顧問に鳩山を
夫博士が就任しておる關係から、北海道開寒別上流にある時價四十億
円の白金鉱へ此れは、札幌帝大の演習地で文部省の所有地となつておる
の、採掘権を譲渡したと云ふ風評も立って、一部の策士が、又此れを
利用して、反鳩山運動を促進するに云つたやうに、鈴木總裁派の苦境は
深刻なものであつた。そこで、当時の鈴木及び政友智略の参謀島田等と

しては、査問委員会を乗り切り切らざると、一方には、中島知久平等を利用し
た所謂政友内の内訌運動であつた。即ち中島等が、その巨万の金力
を拵つて床次、久米派の切り崩しを開始した事だが、此れは、今日失敗
した、と云ふよりも進展した事だ。

しるかに査問委員会は、丁度總裁派に好都合に進展した。先づ島田が
委員長で、鈴木派が絶対多数であつたから、最初から特別の事情の這入
らない限り、總裁派の勝利は豫想された所である。査問委員会を鈴木派
は多数で潰す、岡本及び大同四結派は、委員会内における岡本の暴露を
公然化するの策謀で、主として、この委員会外の策動に主力を注いだ。

査問會の大勢が明白に決定したのは、岡本が軋を脱して淡口問題に言
及した頃からであつた。

ク 最初、即ち査問會の開始された當時は、輒物言ふ舞台で切り廻した岡
本の一人舞台で、全く如何なる代議士君も、岡本に齒が立たなかつた。
しるかに岡本の口が滑って、淡口問題に言及すると、今度は民政党委員

の態度がばらりと変わった。情勢は、政民の暴徳防衛のための共同戦線の開始となつて、高田は悠々業巻をくわへて議事を進行すると云ふ情影がふなつた。

事実無根——この査問會の責状書であるが、事ここ、に違反したのは、勿論、政局一般の動向が然らしむる所で、本藤内閣の存続が、上層切に支持されておる所以である。

この當時、二月二日、牧野内相及び湯浅宮相は、本藤内閣存続論の主張者であつた態度を明かした。

如上、査問委員會の責状によつて、鳩山文相の苦境及び鈴木派の苦境は救はれて、免に命鳩山辞職の道は拓けた。何れにしても、明鏡は水に汚されたと云ふ事で、文相の面目は立つ事となつた。鳩山文相の軍械録職は、本藤内閣存続派の勝利と讃讃なる喝采を拵つてゐる。

三 岡本の態度と怪文書、小山問題

岡本は、久原派の爆撃隊であるが、これを直接に操縦してゐるのは、久原でなく、久原の乾児の津愛代議員である。これは、實際上では同じ事柄のだが、形式上この程度の状態を引く事は久原にとって必要である。

久原派の爆撃隊は、同時に大同回結派の爆撃隊である。大同回結派が査問委員會を敗北した事は、その例運動の一戦に敗北した事である。

査問委員會内では、大同回結派の勝味はない。そこでこの内部に於ける斗争を院内外に、政治的に利用することが、彼等の主力を盡した所であつたのは又当然である。岡本の清瀬一即が、袂度びか声明書を院内外に發表し、岡本も、岡本一流の方法で、大勢非と見るや所謂怪文書を院内外にバラ撒いてゐる。

9 岡本としては、査問委員會で、鳩山問題の事実無根を決定せらるる事は他の凡ての問題、殊に小山法相退任の手を縛る結果となる。岡本は、救日館の赤坂三會堂での口体擁護談話會總會にも出席して、同時に

招待を受けた清瀬一郎、江藤源九郎と共に、私見を述べておる。こゝで彼は、

自分の今回の行動は、決して私利私欲的立場からのなしたものである。松岡氏は政友會を脱党して、政友會解消聯盟を結成し、既成政友會清掃の運動を初めておるが、此れも一方法であるが、自分としては、松岡氏の行動は決して効果的ではない。

こう云ふ運動は、既成政友會から手を切つて運動するよりも、自分等は既成政友會の中で、院内の行動としてやつて効果の無いものがあると思ふ。此れ故に、今のお話へ賛同者の一のやうに、政友會を脱党して、それから始めると云ふ松岡君のやうな行動は採らぬのである。

腐敗せる既成政友會を國民批判の類上りのせ、此れの正否を國民の批判に預けて自分の立場を明らかにすると云ふのが私の主旨で、私

としては、何處までも、政界の革新を急務とし、全々土台の違つた、新しい政友會を作つて行くと思ふのが目的です。

と云つておる。岡本も、院内の清瀬も、口説の席上に出席したのは、勿論口説を招待したの故であるが、免ヶ角、院外の右翼運動と結び付かうとする意志は充分にあった。

岡本が、最近の忙しい時雨を以て出席したが、効果は勿論何物をも生産しなかつた。

次に、岡本は、鳩山閣議に關連する小山法相の責任を別な形において提出した。小山紅蓮運動の第一歩は、所謂「怪文書」を、院内外の閣僚者に配付した事である。神武會の某氏の活動と、憲兵隊の資料と云ふ消息もあるが、免ヶ角は、それを憲兵隊に告訴した。憲兵隊で此れを受理した事は新聞紙に報道された通りであるが、この法相への追跡は、全く失敗に歸した。

岡本の性格と云ふは、その獲得の難易さと云ふは、余りに追跡が過ぎ

夫。事實は全く人違いと判明した譯で、この事件によつて、岡本は最後の決闘場を抜き差しならぬ新地へ追ひ込まれた。何よりも肝心の岡本に對する信用が失はれた。鳩山バクコの折角の大業も相殺さる事になる。又、彼に對する怪文書が、——筆者は、鳩山の乾児だと云ふ話である。——岡本庫に對抗して撒布せられた、岡本は、遂に検事局から起訴された事となり、他方、雜誌種民社主の天田東岡なる者が、岡本の小山法相起訴と詐称して岡本一乙を「詐欺罪」で告訴した。その告訴状は、新聞に發表されたから、参考として次に寫すことにする。

豊島區芝袋ニ、一四六八吉原八雜誌種民社主 天田東岡
 豊島區長崎町新井一八九三被告原八雜誌種民社主 岡本一乙
 詐欺事件の告訴状

一、吉原八は大正十三年以前森格氏の恩顧を受け、被告原八の岡本氏と知り合ひになりし折、被告原八は自己の關係した構工事事件に就いて故森氏を誣報煙滅の共犯者なりと認め、其の名譽を毀損して行

みざり忘恩的態度をとり反りば到底許す可からざる背徳漢なりと信ずるの故を以つて、彼の人格を證明し、その言動により誤られた世人の觀念を正し、併せて斯の人非人に對し國家的膺懲を加ふる要ありと信じ、本告訴をなした次第である。

二、被告原八は、昭和七年九月、滿州視察のため藤原代議士等四名と渡滿して、各地を視察歸朝するや、足利市在住の石川太助と計り、新京中央停車場跡の滿鉄事務所及び此れに接続せる高埠約一万坪を森氏の在世中滿鉄幹部及び滿州口当局より押下げを受く可き諒解を得て置いたが、該地は新京に於ける高業地域として最も繁盛を極め、将来有望の箇所なれば、此れを押下げれば巨利を得べきを以つて此の權利を諸君に分與すべしと欲し、此れに要する押下代金十萬圓を組合組織で募集し、三十余名の應募あり、秋間貞次郎（一萬圓）を始め合計八万五千圓を集めた。

此れよりさき昭和七年十一月、被告原八は前記石川外一名を伴ひ、

新京に赴き、満鉄幹部に對し、林記土地の拂下げ方を交換した所、拒絶せられ、計原屋餅に帰し、應募金を返還せねばならなくなつた折柄、たまたま新京郊外三里堡及び七里堡との中間に一万七千坪の賣地あるを察見、之れを買収して帰朝し、出資者に對しては買増しを許す可しとて追加募集をなし、二万余坪を集めた。

三 然るに右土地は、全然大都市計原の圏外にあるのみならず、現在の時價は全部で一十町内外を越すものでも全く出資募集當時の目的と異り殆んど急價値に等しき土地であるに拘らず有望の土地の如くにいっわり数万坪を採取せる者なり。

四 被告奈人は、文書偽造詐欺罪の材料を有し心を覆は人がたぬか、前後二回に亘り名簿をかへ、女色に溺れ、現に三名の女を蓄へ亂倫の限りを盡し、且つ衆議院にさへ自己の汚穢を明かにせざる不真面目生活を營みつ、あり、か、る非社會的人物が神聖なる議政壇上より嚴肅なる可き綱紀問題を叫び、一世を聳動せし争はまことに國民に

對する一大侮辱にして、心ある者の痛憤おく能はざるなり。

之れ一切の私情を抛ち、本件の徹底的糾明を求むるの止むなきに至りし所以なり。

と云ふので、何ふも斯の告発者と怪文書の筆者は一職の連りがあつたやうである。

及田東岡氏のもの、背景は、現在の所想像だけであるが、近く又正体が出現するであらう。兎に角この問題の将来は面白い。

果して岡本の没落を招き、赴いては彼の政治的生命の最後となるか。

三 平沼派と宇垣派の抗争

平沼派の運動は、本議會の政局動搖を通じて、可成り大きく奈辰してきた。一部は宇垣の策動に對して、それを抑止するためである。平沼擁立で上部工作に活躍してゐるのは、何と云つても第一人者が樺山英資であらう。氏は上部要路に活躍の舞台を持つておると云ふのみならず、黒

龍會、口本擁護聯合會等の專即、即ち浪人組と特別な関係にある。

榊山氏の即筆には、この二週間はかり、毎夜、如く浪人がおしかけて院外工作の打合せ協議をなしてゐる。現在平沼擁立の分野を見ると、(一)政友會久原系の教名、(二)國民同盟の中野系、(三)軍部中堅右翼、(四)明倫會皇道會等である。以上、政友會久原系の擁立運動参加は、勿論一面久原の擁立目標が明確でなく、日知見主義的割込主義の立場の致す所であらうが、現在の所、何人的参加の程度と観測するのが至当であらう。

國民同盟は中野が、山道の宇垣擁立に對置して、平沼擁立を表明し、又これを公然と表明して平沼擁立に呼應してゐる。しかし國民同盟では肝心の中野自身が、平沼内閣の予定表に列してゐない。これは如何なる事情によりのか。

平沼内閣の顔ぶれは、首相平沼の下に、内務安達、外務広田、大藏勝田主計、陸軍林、海軍大角、文部近衛、司法原嘉道、農林後藤、高工榊山資英、若くは結城豊太郎、逓信川崎卓吉、拓務松岡洋右、内閣書記官

長二上矢治、法相局長官徳積重遠、警備高橋守雄、警保局長森岡二郎と云ふ公式になつてゐるが、火く共、こゝに逓信大臣にでもと豫想される中野が記載してない。

これは、國民同盟内の對立が然らしむる所であるが、單に中野が内閣内信用を失はたと云ふのみならず、最近中野の伏線が明白となつた故である。

それは、中野の最近の行動が、全く政治的技師の日知見主義に脱して、彼が工業倶楽部の某氏や、松永安左衛門氏等のシンパ網形成の際に安達をロボットとして使用した事から、安達も勿論此等のシンパ網形成には暗黙の諒解を與へてゐた譯であるが、この資金獲得運動の過程に、中野が宇垣の金を使用してゐた事が明白となつた譯である。

安達は、中野が宇垣擁立の第一人者榊畑勝太郎の金を使つてゐる事を或る人にもらしてゐる。又、平沼のところへの情報によると、中野はその主義理論の建前からして、表面はこゝまでも平沼擁立を呼称してゐる

が、實際の目的は政权に割り込かことである。宇垣の可能性ありとするは、背後に、その背陣を敷く事は肝要である。こゝに、中野の右手に於ける平沼、左手に於ける宇垣となつた試み、こゝに中野が、平沼派と國同内安達派に政壇のレツテルをおさした理由がある。

又、前記の平沼内閣の顔ぶれに、安達の内務と反対に、荒木前陸相の内務、文部兼任説もしきりに唱へられてゐる。高工の樺山は、余りに平沼に近いので、結城の方が確実である。大藏勝田主計は、政治的色彩よりも、財政的エキスパートの故であつて、反対に宇垣としても勝田入閣の呼び声は高い。

平沼内閣の政治的色彩は、現在ばかり論議されてゐるところである。即ち第一は、平沼内閣が結局財閥兼力内閣の衆形に過ぎぬとする者と、一方にはこれと反対に、及財閥的右翼的内閣として期待してゐる者もある。然し現在の時期に於いて平沼内閣がこの兩者のいづれをも徹底する事は不可能であらう。原則として見れば、政治的変革期に非ざる及資本

主義的行政の樹立は不可能であるし、又こう云ふラインの政策を実行する事も不可能であらう。

只、平沼内閣の成立の條件が、現在財閥の擁立する、宇垣擁立運動と對置して、且及宇垣、及財閥的諸層によつて成立を策される以上、其の特殊の傾向と矛盾を持つのは当然である。

即ち、平沼内閣の及政党的、及財閥的傾向は、若し平沼内閣が成立し且と假定する時の議會戦術にその一端を伺はれる。平沼内閣は、組閣と同時に議會解散を断行する方針である。これによつて既成政党的の敗北を予定し、其の清算を怠す豫定がある。これによつて平沼内閣の樹立は、これを繞る在野各派運動及び部急進派の國民運動の進展如何によつて、更に広汎なる國民的右翼革命運動を促進する事になるかも知れない。尚ほ前記平沼擁立運動に於ける軍部活動者は、旧荒木系の鈴木貞一、大佐、英真次中將、及び純正右翼の池田中佐、満井中佐等であると傳へられてゐる。

鬼に命以上の事実を見ても、平沼内閣に対する財閥層の諒解が、相当骨の折れものであること、平沼内閣が、財閥層に対する部分的攻撃を開始する事も予想される。

一方、宇垣の運動は、旧態依然たる速度で進行してゐる様で、平沼内閣と共に、現在の実現性は甚しいものとしなければならぬ。

四、齊藤内閣の前途

齊藤内閣は、鳩山内閣の解決と、そのバクロー者岡本一己の何人敗北によつて大体安定の緒を見出したと云へやう。後任文相には、國岡で飛ばした鶴沢聰明博士と、政友會では木下辰太郎の就任説等もあるが、文相の決定は貴族院の峠を越してからであらう。

齊藤が後任文相の椅子を決定しないのは、背水の陣と云ふよりも、貴族院に対する懸引からである。貴族院は、伊沢一派小救派の攻撃があるだけに、大局は齊藤内閣支持である。

岡本事件によつて捲き起さるる齊藤内閣危機の際には、大體、高橋内閣の現実性が強かつた。次ぎには、大命再降下説で、予算通過後に齊藤は形式上辞職を上奏し、大命再降下の運びとなる争、かくて、現在は、齊藤内閣の展望やうやく安定の曙光^光きざして、無事存続と云ふ見透しになつた。

特別の事情の発生を見ぬ限り、低迷せる暗雲は一掃されて、そのまゝ、一般消息通が語るが如く、本年秋の予算編成期まで無事進行するものではないか。

昭和九年三月十五日 印刷
昭和九年三月十八日 發行
「非売品」
大坂市北区梅ヶ枝町梅ヶ枝ビル
発行所 大月社會問題調査所
兼編輯 大月久 治

